

加藤忠史 責任編集, 山脇成人, 神庭重信 総監集

《精神医学の基盤》4

精神医学の科学的基盤

田中謙二

《精神医学の基盤》第2期というくくりで、「科学的基盤」、「仮説とその検証」、「疫学と臨床試験」の3つが立案され、その1つめ「科学的基盤」を加藤忠史氏が担当した。加藤氏は、四半世紀にわたり日本の脳科学を牽引し続けた巨人であり、書籍も多い。彼の書籍の一つに過ぎないのなら、読まないで彼と直接話したほうが時間の節約になると思いながら読み始めた。幸い、加藤氏は編者であり、彼の書籍の一つではなかった。加藤氏の声かけに応じた14名が、独自の視点で、「精神医学の科学的基盤」について書いている。総じて、研究者寄りの著者の作品は、担当研究分野について当たり障りなく、著者の思い入れを排除して書かれている。皆、真面目だ。それはそれで良い。目を引いたのは、この人が精神科のサイエンスを語るのかと思わせる人選と、その私の浅い考えを吹き飛ばす精神医学についての各人の熱量であった。

書評の結語として、先に述べる。精神医学を科学の視点から学びたい、科学として扱いたい、科学として研究したいという若手に読んでもらいたい。そして、10年くらい科学研究を続け、精神医学の科学的基盤を知ったつもりになっている中堅に読んでもらいたい。

科学とは何か、ということをおまじり考えないで科学に接するのが今時の大学生、大学院生ではなからうか。同じことが、精神科研修を終えて研究でもやってみようかと構え始める医師にも言えまいか。今は、さまざまな技術が若者達の目の前にあり、技術に飢えることがない。本人がその気にさえなれば、何でもやれる。ヒトiPS細胞だって培養できるし、次世代シーケンサーだって稼働させられる。目

の前のものから手を付けてみるというのが、研究者養成でよくやる手段なので、まずはこの研究室で稼働している技術を身につけてごらん、という指導になる。その技術を使って、データが得られる。統計をとってみると、有意差が得られる。初学者は少し科学が分かった気になる。では、その差が何によって生じたのか、メカニズムを明らかにしていこうと指導者は若手を導いていく。こんな感じである。この指導に、科学とは何かを問い詰める厳しさは無い。言い訳として、厳しく問い詰めると、すぐ辞めていくので、最近では厳しく問わない。

だからこそ本書が活きる。とりあえず精神科基礎研究を始めた人、これから始めたい人に、精神医学における科学とは何かを考えてもらいたい。難しい内容もある。10年程度経験しないと実感できないかもしれない。できることなら、mechanisticな科学とpragmaticな科学(榊原英輔氏)、精神科の病気の本質(植野仙経氏)、病理を個体にみるか関係性にみるか(池田暁史氏)、精神分析における生成論と計算精神医学における生成モデルの比較(池田暁史氏、宗田卓史氏)。

これら5人の著者の考えに触れることが、精神医学における科学とは何かをあらためて考える端緒になる。科学とは何かを考えすぎるのもまた良い。意識を扱う(扱いたい)高畑圭輔氏の、科学に対峙する苦しさを見て取れるだろう。

(慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室)

●B5 192頁 2020年 定価: 4,500円+税 学樹書院刊